

サミュエル・ガースの『薬局』における 古典叙事詩の技法

—— 冥界下りの挿話を中心に* ——

高 谷 修

サミュエル・ガース (Samuel Garth, 1661-1719) の『薬局』(*The Dispensary*, 1698) は全体的な構成において、ギリシア・ローマの古典叙事詩に多くを負っております。詩はまず詩神への祈願 (invocation) から始まりますが、invocation は叙事詩における約束事コンヴェンションの一つであることは指摘するまでもないことでしょう。また古典叙事詩に見られる顕著な技法の一つに「冥界下り」の挿話があります。ウェルギリウス (Publius Vergilius Maro, 70-19 B.C.) の『アエネーイス』(*Aeneis*) では第6歌において、主人公アエネーアース (Aeneas) はシビュッラ (Sibylla) の案内で冥界を訪れ、父アンキーセース (Anchises) にあい、自らの家系の将来の栄光を教えてもらいます。さて、その冥界下りですが、ガースがモデルとしているウェルギリウスの『アエネーイス』では、冥界下りの挿話は作品全体のほぼ中央である第6歌において描かれます。ガースの『薬局』においては、しかしながら、作品の中央部では描かれず、作品の最後第6歌において語られます。ガースは多くの点で古典叙事詩の

* 本稿は、日本ジョンソン協会第47回大会 (2014年7月12日、東京ガーデンパレス) におけるシンポジウムでの発表原稿に加筆訂正を施したものである。

コンヴェンションを踏襲していますが、この点はウェルギリウスに倣っておりません。

本発表では、ガースはなぜ冥界下りの挿話を作品の一番最後に描いたのか、なぜウェルギリウスのように作品中央部ではなく最後に移したのか、という問題を考察したいと思います。この点を以下3つの視点から考えたいと思います。まず第1に invocation という技法に関して古典叙事詩とガースにおける相違を考察し、その特質を確認したいと思います。第2に、『アエネーイス』第12歌で描かれる、アエネーアースとトゥルヌス (Turnus) との一騎打ちの場面と、これを下敷きにしている、クウェルポ (Querpo) とステントール (Stentor) との一騎打ちの場面とを比較し、両者の違いとその意味を考えます。3番目に『薬局』における冥界下りの場面を考察し、その後で、結論を述べるという手順ですめたいと思います。

I invocation

では、まず、次の引用をご覧ください。すでに述べましたように、『薬局』におても、古典叙事詩のコンヴェンションは守られており、以下のように始まります。

Speak, Goddess! Since 'tis Thou that best canst tell,
How ancient Leagues to modern Discord fell;
Whence 'twas, Physicians were so frugal grown
Of others Lives, and lavish of their own;
How by a Journey to th'Elysian Plain
Peace triumph'd, and old Time return'd again. Canto I, 1-6.¹ 下線は筆者、以下同様

1 Frank H. Ellis, ed. *Poems on Affairs of State, Augustan Satirical Verse, 1660-1714*, New Haven and London: Yale University Press, 1970, p. 63. 以下引用はこの Ellis 版に拠る。

女神よ、語れ！ あなたこそ最高の語り手なのだから。
 古来の団体に近頃不和が生じたわけを。
 医師たちが他人の命を蔑にし、
 わがことのみ考えるようになったのはどうしてなのかを。
 そして、冥界への旅によって
 平和が勝って昔の状態が回復した^{いきさつ}経緯を。

日本語訳をつけましたが、なるべく逐語的な訳文を心掛けました。（以下の引用においても同様です。）詩人はまず古典叙事詩の作法に倣って、詩を語るにあたり女神に靈感を与えてくれるように援助を祈願します。この invocation において、詩人が語る内容が、最近の医師会の間の不和のことであることが明らかにされます。2 行目で言及されます「古来の団体」とは医師会を指しています。そして、この医師会内部の不和（Discord）は、冥界への旅によって解消し、昔のような平和が訪れるというのです。その様をこれから詩人は語ろうというのです。

さて、このような invocation の技法は、古典叙事詩に由来するものです。そこで、古典叙事詩における invocation の実際をホメーロス（Ὅμηρος）とウェルギリウスにおいて、検討したいと思います。まずホメーロスの『オデュッセイアー』（Ὀδυσσεΐα）を見てみましょう。『オデュッセイアー』は次のように始まります。

ἄνδρα μοι ἔννεπε, μοῦσα, πολύτροπον, ὃς μάλα πολλὰ
 πλάγχθη, ἐπεὶ Τροίης ἱερὸν πτολίεθρον ἔπερσεν:
 πολλῶν δ' ἀνθρώπων ἶδεν ἄστεα καὶ νόον ἔγνω,
 πολλὰ δ' ὃ γ' ἐν πόντῳ πάθεν ἄλγεα ὃν κατὰ θυμόν,
 ἀρνύμενος ἦν τε ψυχὴν καὶ νόστον ἐταίρων.
 ἀλλ' οὐδ' ὥς ἐτάρους ἐρρύσατο, ἰέμενός περ:
 αὐτῶν γὰρ σφετέρῃσιν ἀτασθαλίῃσιν ὄλοντο,
 νήπιοι, οἳ κατὰ βοῦς Ὑπερίονος Ἥελίοιο
 ἥσθιον: αὐτὰρ ὁ τοῖσιν ἀφείλετο νόστιμον ἦμαρ.

τῶν ἀμόθεν γε, θεά, θύγατερ Διός, εἰπὲ καὶ ἡμῖν. (Ὀδυσσεΐα I, 1-10)²

かの人を私に語れ、ムーサよ、才知に富んだ人を。彼は大きい方々を
流浪した、トロイエーの尊い都を攻略した後で。

多くの人々の町を知り、彼らの精神を学んだ。

そして海上で多くの辛酸を心で嘗め、

また彼の命を救い仲間の帰国に努めた。

また、いかに、彼が仲間を助けられなかったか、熱望していたにも拘らず。

というのも、彼ら自身の傲慢さにより彼らは滅びたのだ、

愚かな者たち、彼らは太陽神ピュペリーオーンの牛を

食い尽くした。神は彼らから帰国の日を奪った。

これらの事のうちどこからでも、女神よ、ゼウスの娘よ、我々にも語ってくれ。

『オデュッセイアー』は以上のように始まります。ホメーロスはまず詩神（ムーサ）に祈願いたします。「かの人」とはいうまでもなく、オデュッセウス（Ὀδυσσεύς）を指します。invocation で明らかになりますように、彼はトロイア陥落の後、10年の間方々を流浪します。最初は仲間も一緒でしたが、彼らは日の神ヒュペリーオン（Ἵπερίων）の牛を殺して食したことで、神の怒りを買い帰国できませんでした。オデュッセウス自身は妻ペーネロペイア（Πηνελόπεια）の待つイタケーに帰還いたします。詩人はまず、このようなオデュッセウスの諸国流浪と帰還の話を語るにあたり、手助けしてもらうように詩神に援助を請うているわけです。そして、彼の語る内容は、ほぼこの invocation の中に示されているといつてよいと思います。つまり作品としての『オデュッセイアー』の内容はこの invocation の中に要約の形で示されています。この点に関しては、ウェルギリウスにおいても同様です。次にウェルギリウスの叙事詩を見たいと思います。

2 Homer. *Homer, The Odyssey*. Ed. A. T. Murray. 2 vols. The Loeb Classical Library. London: William Heinemann, & Harvard University Press, 1954, vol. 1, p. 2.

このホメーロスの invocation は、ローマの詩人であるウェルギリウスにも引き継がれてゆきました。彼はホメーロスをもとにして、ローマ建国の叙事詩『アエネーイス』を書きましたが、その巻頭の部分はこのホメーロスがローマに引き継がれていることがよく分かる部分だと思います。では、『アエネーイス』の冒頭の invocation を見てみましょう。次の引用です。

Arma virumque cano, Troiae qui primus ab oris
 Italiam, fato profugus, Laviniaque venit
 litora, multum ille et terris iactatus et alto
 vi superum saevae memorem Iunonis ob iram;
 multa quoque et bello passus, dum conderet urbem,
inferretque deos Latio, genus unde Latinum,
Albanique patres, atque altae moenia Romae.

Musa, mihi causas memora, quo numine laeso, . . . *Aeneis* I, 1-8.³

戦いと人とを私は歌う、まず最初にトロイアの岸辺から
 イタリアへ運命により追われてラウィーニアの岸にやって来た
 人を。大いにその人は陸においても海においても辛酸をなめたが、
 神々の力と残酷なユノーの和解できない怒りによって。
 大いにまた戦いに苦しみ、遂には都を建て
 ラティウムに神々を移した、——そこからラティウムの種族、
 またアルバの長老たちや、高きローマの城壁が [生まれる]。
 ムーサよ、私に原因を語ってくれ、どのような神が蔑にされて…

ウェルギリウスは「戦いと人とを私は歌う」と述べますが、この「人」とは、アエネーアースを指します。アエネーアースはトロイアの都が滅亡して以後、オデュッセウスのように 10 年、陸に海に流浪しますが、その彼を歌うといえます。アエネーアースは最後にラティウムの地に至り、第二のトロイアの礎を

3 Virgil. *Virgil*. Ed. H. R. Fairclough. 2 vols. The Loeb Classical Library, London: William Heinemann, 1916. New & Revised Ed. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. 2001, vol. 1, p. 262. 以下引用は Loeb 版に拠る。

築きますが、そして第2のトロイアはローマ帝国になるのですが、詩人ウェルギリウスはアエネーアースが都を打ち立てるまでを語るといいます。「私は歌う」cano といっておりますが、「ムーサよ、私に語ってくれ」（8行目）に見られますように、女神に対する援助を忘れてはいません。

さて、invocation について、確認しておきたいことは、叙事詩は詩神に対する祈願で始まること、そして invocation の中で語られる内容が要約の形で紹介されるということです。ガースの invocation から、医師会の不和は終わりとなり最終的に平和が訪れることが分ります。しかしその平和は、この段階ではまだどのような平和なのかは分かりません。invocation が述べる平和が、薬局設立賛成派が薬剤師派医師軍に勝利しての平和なのかどうかは、分かりません。ガースにおける invocation に関しては、また後で触れたいと思いますが、話を先に進めたいと思います。

II アエネーアース vs トウルヌス、クウェルポ vs ステントール

『イーリアス』（*Ιλιάς*）においては、ヘクトール（Ἑκτορ）は勇ましい武将として描かれていました。第6歌において、ヘクトールと妻アンドロマケ（Ἀνδρομάχη）の別れの場面が描かれています。この場面は『イーリアス』全体の中でも実に感動的な場面となっています。彼は優れた武将であります、同時に優しい父であり、また思いやりのある夫でもありました。さて、このヘクトールに相当するのが、クウェルポです。彼は薬剤師派の医師であり、薬局設立反対派に属しています。第4歌において、クウェルポは薬剤師派軍を主導して戦い、遂には薬局設立賛成派の頭目でありますステントールと一騎打ちを行います。この一騎打ちの場面は、『アエネーイス』第12歌のアエネーアースとトウルヌスとの一騎打ちの場面をモデルとしていることは明らかです。

二つの場面を比較検討したいと思います。まず『アエネーイス』第12歌のアエネーアースとトウルヌスの戦いの場面は以下のように描かれています。次

の引用をご覧ください。

stetit acer in armis
Aeneas volvens oculos dextramque repressit;
et iam iamque magis cunctantem flectere sermo
cooperat, infelix umero cum apparuit alto
balteus et notis fulserunt cingula bullis
Pallantis pueri, victum quem vulnere Turnus
straverat atque umeris inimicum insigne gerebat.
ille, oculis postquam saevi monumenta doloris
exuviasque hausit, furiis accensus et ira
terribilis: ‘tunc hinc spoliis indute meorum
eripare mihi? Pallas te hoc vulnere, Pallas
immolat et poenam scelerato ex sanguine sumit.’
hoc dicens ferrum adverso sub pectore condit
fervidus. Ast illi solvuntur frigore membra
vitaque cum gemitu fugit indignata sub umbras. *Aeneis*, XII, 938-952.

鋭い気合いで武器を構えて立ち、
アエネーアースは眼をぎらつかせていたが、右手を止めた。
躊躇する者〔アエネーアース〕を、ますます相手の言葉が
動かし始めていた。その時、肩の上に不運な剣帯が見えた。
帯は見覚えのある鍔の光を輝かせた。
若者パラスの物だが、トゥルヌスが一撃のもとに
倒し、敵の形見を肩から吊るしていたのだ。
彼は、眼によって残酷な悲しみを思い起こさせる
戦利品を理解したが、狂気と怒りで燃え上がり、
恐るべきものとなった。「お前よ、わが仲間の戦利品を身につけている者よ、
ここでお前は私によって助けられることがあるだろうか？ パラスがお前をこの一撃で、
パラスが犠牲に供しているのだ、汚れた血により罪の報いを果たしているのだ。」
このように言って、怒りに燃えて剣を敵の胸に押し込んだ。
すると、この者の四肢は力を失い、
命はうめき声をたて、怒りに燃えながら、死者たちの所へ去る。

アエネーアースは敵将トゥルヌスの命乞いを一時は聞いて、命を助けてやろう

かと思案するのですが、丁度そのときに、たまたまトゥルヌスの肩にある、トロイアの若者パラスから奪った戦利品である剣帯がアエネアースの眼に入ります。これによって怒りに駆られたアエネアースは容赦なく彼を殺します。こうしてアエネアースのラティウムにおける覇権が確立されることになります。ウェルギリウスは偶然によってアエネアースが怒りに駆られて殺害するように描いていますが、実はこの殺害という行為はなされなければならないことであります。—— そうでなければ、第2のトロイアは極めて不安定なまま存在することになります—— その意味では偶然の形をとった必然ということができると思います。さて、ではこの一騎打ちの場面を下敷きにしている、クウェルポとステントールとの戦いはどのように描かれているのでしょうか。見てみましょう。以下の引用をご覧ください。

The Chief at this the deadly stroak declin'd,
 And found Compassion pleasing in his Mind.
 But whilst he view'd with Pity the distress'd,
He spy'd Signetur writ upon his Breast.
 Then tow'rds the Skies he toss'd his threat'ning Head,
 And fir'd with mortal Indignation, said;
 Sooner than I'll from vow'd Revenge desist,
 His *Holiness* shall turn a *Quietist*.
 La Chase shall with the *Jansenists* agree,
 The Inquisition wink at heresy.
 Faith stand unmov'd thro' Stillingfleet's Defence,
 And *Lock* for Mystery abandon sense.
 With that, unsheathing an Incision Knife,
 He offer'd at the prostrate *Stentor's* Life.
 But while his Thoughts that fatal Act decree
Apollo interpos'd in form of Fee. Canto 5, 221-236.

武将クウェルポはこれを聞いてとどめの一撃を思いとどまり、
 同情心が湧き起こるを感じた。
 しかし哀れみをもって敗者を眺めると、

署名がその胸に書き込まれているのを見つけた。

そこで天に向かって威嚇するように頭を振り上げ、
激しい怒りに突き上げられてクウェルボはこう言った。

「ここで私が心に誓った復讐をやめるようなことがあれば、
兎下も静寂主義者になるであろう。

ラ・シェーズもヤンセン主義者に同調するだろう。
宗教裁判所は異端に目をつぶり、
スティリングフリートが弁護しても信仰心はかき立てられないだろうし、
ロックは合理を捨てて神秘に走るだろう。」

こう言って、切開メスを鞘から抜き、
ひれ伏すステントールの命を狙った。
しかし、とどめの一撃を加えようと思ったそのとき、
アポローンが診察料の形となって間に割って入った。

クウェルボはステントールの嘆願を聞いて、一度は同情心から彼の命を助けてやろうと考えます。しかしその時に、アエネーアースと同様に、彼の胸にあるもの（それは「署名」なのですが、この説明は省略させていただきます）を眼にします。これを見て激怒し、ステントールに止めをさそうとします。ここまでは、アエネーアースと同様です。しかし、殺害しようとした刹那、アポローンが「診察料の形をとって」介入してきます。このあたりがいかに擬似英雄詩らしい処だと思いますが、ともあれ、ステントールは殺害されません。アポローンの介入によって、勝敗の帰趨は不明となり、よって戦いは膠着状態に陥ることが示されます。この点は、『アエネーイス』とガースとの大きな相違点です。

ウェルギリウスにおいては、二人の対決は最終的にアエネーアースがトゥルヌスを殺し、決着が付きます。アエネーアースが勝利し、トロイア方のラティウムにおける覇権が確立されることがわかります。一方、ガースにおいては、勝敗の帰趨は不明であり、従って戦いは膠着状態に陥ることが示されます。その相違点の意味については、結論で触れたいと思います。

Ⅲ 冥界下り

戦いが膠着状態になった時に、健康の女神ヒュギエイアー (Ἵγίεια)⁴ が戦場に現れ、戦士たちは恐怖におののいて、退散いたします。女神は薬局設立賛成派の総大将であるマカーオーン (Machaon) に、セルサス (Celsus) を使者として冥界に派遣し、ハーヴィー (William Harvey) に援助を求めるように、忠告いたします。その場面は以下のように描かれます。

From her bright Lips a vocal musick falls,
As to *Machaon* thus the Goddess calls:
Enough th' Achievement of your Arms you've shown,
You seek a Triumph you shou'd blush to own.
Haste to th'*Elysian* Fields, those bless'd abodes,
Where *Harvy* sits among the Demi-Gods.
Consult that sacred Sage, He'll soon disclose
The method that must terminate these woes.
Let *Celsus* for that Enterprize prepare,
His Conduct to the Shades shall be my care. Canto 6, 9-18.

女神がマカーオーンに呼び掛けるときに
その輝く唇からもれ出する声は音楽のようだ。

「あなたの武勲はもう充分見せてもらいました。
これ以上の勝利は言わぬが花です。
エリュシオンへ急いで向かいなさい、
ハーヴィーが神人たちに混じって座っているあの祝福された場所へと。
あの聖なる賢人に相談すれば、
この災いを終りにする方策をすぐに教えてくれるでしょう。
セルサスに冥界へ下る準備をさせなさい。
案内は私が引き受けましょう。」

ここで、注目しなければならないことは、ハーヴィーに助言を求めれば、「こ

4 『薬局』においては Higeia (第6歌38行) と表記されている。

の災いを終りにする方策をすぐに教えてくれるでしょう。」(15-16行)と女神が述べていることです。つまり、ハーヴィーは勝利する方法を教えるのではなく、災いを終わりにする方策をしてくれるだろう、といているのですが、この点は忘れてはならないと思われます。

使者となったセルサスはヒュギエイアーに導かれて冥界に下ります。アエネーアースは黄金の小枝をもって行きましたが、セルサスはアモームム(Amomum)といわれるものを持ってゆきます。このアモームムの詳細はよく分かっていないようです。アエネーアースは冥界を進むうち、嘗て愛した女性であるディードー(Dido)と出会いますが、セルサスも同様です。アエネーアースはディードーに素気無い態度をとられましたが、セルサスも同様です。

さて、女神ヒュギエイアーに導かれたセルサスが黄泉の国を進んでゆくと、遂にはハーヴィーに出会います。そしてハーヴィーはセルサスに次のような助言をいたします。次の引用をご覧ください。

But now such wondrous Searches are forborn,
And Paean's Art is by Divisions torn.
Then let your Charge attend, and I'll explain
How Physick her loft Lustre may regain.

Haste, and the matchless *Atticus* Address;
 From Heav'n, and great *Nassau* he has the Mace.
 Th'oppress'd to his *Asylum* still repair;
 Arts He supports, and Learning is his care. Canto 6, 253-260.
 しかしこのような驚異に満ちた研究は、今では見捨てられ、
 パイエーオーンの術は不和により引き裂かれています。
 ですからあなたの使者によく聞くように言ってください。
 どうすれば医術が失った輝きを取り戻せるかを説明しましょう。
 並ぶ者なきアッティクスに急いで会いに行きなさい。
 神と偉大なナッサウから職杖をいただいたお方だ。
 抑圧された者たちは皆、保護を求めて彼のもとに行くのです。
 彼は学芸を支え、学問に関心を寄せておられる。

彼の言葉にある、「パイエーオーンの術は不和により引き裂かれている」（引用文の2行目＝254行目）という言葉覚えておきたいと思います。彼の助言の要点は、アッティクスに保護を求めよ、というものでした。そうすれば、彼が嘗ての医学の栄光を取り戻してくれる、というのです。258行で言及される「偉大なナッサウ」とはウィリアム3世を指しています。アッティクスはサマーズ男爵ジョン・サマーズ（John Somers, 1651-1716）を指していますが、彼はウィリアムの信任の厚いホイッグ派の中心人物でした。この人物を頼りにするようにハーヴィーは助言するのですが、彼の助言はまだ続きます。次の引用です。

To him you must your sickly State refer,
 Your Charter claims him as your Visiter.
Your Wounds he'll close, and sov'reignly restore
Your Science to the height it had before. Canto 6, 271-274.

あなた方は医師会の病んだ状況をアッティクスに報告しなければならない。
 そして、特許状を見せて彼に視察官となってもらいなさい。
 そうすれば彼はあなた方の裂け目を縫い合わせ、
 最高の権威をもって、あなた方の学問を以前の高みへと戻してくれるだろう。

ハーヴィーは、アッティクスに視察官になってもらうことを薦めます。そうすれば、「彼はあなた方の裂け目を縫い合わせ」（273行目）てくれるだろう、というのです。「縫い合わせる」という表現は単に相手が医者であるから、という理由だけで使われているのではなさそうです。

さて、セルサスは、薬局設立賛成派の総大将マカーオーンに命じられて冥界にハーヴィーを訪ねてやってきました。彼自身も薬局設立賛成派であります。ところでハーヴィーの助言に注目してみると、ハーヴィーは、薬局設立賛成派が敵対する薬剤師派の医師たちを相手に勝利する知恵を授けているのではないことが分かります。ハーヴィーの助言は、〈不和により引き裂かれているパイエーオーンの術〉を癒すこと、また医師会の裂け目を縫い合わせる方法を助言しています。この点に注意する必要があると思われます。

結 論

さて invocation の考察のところで、invocation においては、語られる内容が要約という形で示される、ということを指摘しました。もう一度、ガースの invocation を振り返ってみますと、彼は女神に、いかに薬局賛成派が薬剤師派医師をやっつけたか、また反対に、いかに薬剤師派医師軍が薬局賛成派を殲滅したかを語るように祈願してはいませんでした。彼が詩神に語るように求めたものは、いかに〈冥界への旅によって、平和が勝って昔の状態が回復したかという、その経緯^{いきさつ}〉でした。この詩のテーマは、どちらかがどちらかに、いかに勝利したか、ということではなく、いかに平和が回復されたか、ということだったのです。

「冥界下り」という技法についてですが、ガースがウエルギリウスの『アエネーイス』に倣っていることは明らかです。冥界下りの挿話は『アエネーイス』のほぼ中央である第6歌において描かれます。しかし、ガースは冥界下りの挿話を、作品の最後に移しました。『アエネーイス』の冥界下りの挿話においては、アエネーアースの父アンキーセースは訪ねてきた息子に、将来のアエネーアースの血統から生まれ出る子孫たちを示します。ローマの栄光ともいべき人物たちですが、この中にはカエサル (Gaius Iulius Caesar, 100-44B.C.) やアウグストゥス (Augustus, 63 B.C.-A.D.14) も含まれています。アンキーセースはまた、アエネーアースにイタリアの地での戦いと試練とをどのように耐え、また切り抜けたらよいか、その方法を教えます。この知恵を授けられたアエネーアースは、最終巻である第12歌において、敵トゥルヌスを倒して、イタリアにおけるトロイア人の覇権を確立いたします。冥界下りの挿話は作品全体の中ではほぼ真ん中にあたる第6歌において描かれますが、冥界で父親から将来の栄光を教えられたアエネーアースは、これに勇気づけられて敵トゥルヌスと対決し勝利するのです。

一方、『薬局』においては、冥界くだりの挿話は作品の一番最後に置かれて

います。ガースにおいて戦いは冥界下りの直前で語られます。すでに見ましたように、第5歌において、薬剤師派の医師クウェルポは薬局設立賛成派の医師であるステントールと一騎打ちを繰り広げます。この場面は『アエネーイス』の第12歌の最後で描かれるアエネーアースとトゥルヌスの戦いが下敷きになっていることは既に見た通りです。アエネーアースはトゥルヌスの命乞いに心動かされるものの、最後にはトゥルヌスを殺します。ガースにおいてもクウェルポは、命乞いをするステントールを一度は容赦しようと考えますが、最後には思い直し止めの一撃を加えようとします。ここまでは同じです。しかし『アエネーイス』においては、トゥルヌスは殺されるのに対して、ガースにおいてステントールは殺されません。アポロンが診察料の形となって間に割って入るからです。つまり戦いの帰趨は不明なままで膠着状態になります。

この膠着状態を打開するために、健康の女神ヒュギエイアーが現れ、マカーオーンに対してセルサスを冥界に派遣して、ハーヴィーに会うように助言するのです。女神は、ハーヴィーが「この災いを終わりにする方策をすぐに教えてくれるでしょう」‘He’ll soon disclose / The method that must terminate these woes.’ (15-16) といいます。ここで女神は「戦いに勝利する方策を教えてくれるでしょう」とはしていないことに注意する必要があります。つまり彼女は「この災いを終わりにする方策」といっています。また冥界にいるハーヴィーは、訪ねてきたセルサスに、アッティクスが「あなた方の裂け目を縫い合わせ、最高の権威をもって、あなた方の学問を以前の高みへと戻してくれるだろう。」と予言します。ここで「あなた方の裂け目」とは医師会内部の分裂を意味していました。つまりハーヴィーの予言は、薬局設立賛成派の医師たちと薬剤師派医師との分裂を修復する方法を述べているのであり、セルサスに薬剤師派医師たちとの戦いに勝利する方策を述べているわけではありません。この点にガースの意図を汲み取ることができるように思います。

第1歌の invocation において、詩人は女神に「冥界への旅によって平和が勝って昔の状態が回復した^{いきさつ}経緯を」語るように祈願しておりました。ガースの

求めたものは医師会内部の分裂の修復であり、その結果として生じる平和であったといつてよいと思います。そのために冥界下りの挿話は作品中央部ではなく最後に配されたといえるのではないかと考えております。

参考文献

- Bates, Catherine, ed. *The Cambridge Companion to the Epic*. Cambridge: Cambridge University Press, 2010.
- Cook, Richard I. *Sir Samuel Garth*, Twayne's English Authors Series, 276. Twayne Publishers, 1980.
- Ellis, Frank H. ed. *Poems on Affairs of State, Augustan Satirical Verse, 1660-1714*. New Haven and London: Yale University Press, 1970.
- Homer. *Homer, The Iliad*. Ed. A. T. Murray. 2 vols. The Loeb Classical Library. London: William Heinemann, & Harvard University Press, 1954.
- Leicht, Wilhelm Joseph. *Garth's "Dispensary"*. Heidelberg: Carl Winter, 1905.
- Virgil. *Virgil*. Ed. H. R. Fairclough. 2 vols. The Loeb Classical Library. London: William Heinemann, 1916. New & Revised Ed. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001.
- サミュエル・ガース『薬局——十七世紀医師薬剤師大戦争』西山徹編集訳、高谷修、服部典之、福本宰之訳、音羽書房鶴見書店、2014。